

Title	機械と労働者
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.1 (1936. 1) ,p.129- 138
JaLC DOI	10.14991/001.19360101-0129
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360101-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

門店佐兵衛であつた。家主傳右衛門は角筈村名主で、前記渡邊氏の先祖である。この帳簿にはこの天保三年の事件を最後として白紙散葉が残されてあつた。

以上の記録に依つて、吾人は多くの示唆を受け得ると思ふ。地廻米問屋仲間の擴大や仲間制度の獨占排他主義についてはずでに指摘した。さらに幕府當局はこの仲間組合を大體に於いて支持する方針であつたこと、又問屋仲間がしきりに違反者の發見に努めたに拘らず、その所罰は——少なくとも表面に現れたところでは——將來を戒めるに過ぎなかつたこと、又かうした違反者は恐らく相當あつたものと思はれ、それが又問屋仲間の買入直段が比較的安價であり、之に反してその實價は高價であつたのではないかと考へさせる。かくして天保二年の後、約十年にして、水野越前守忠邦の問屋仲間廢止の令が下つたのであつた。その間に相關聯するところがあるとも考へられる。しかし天保改革は全く今までの幕府の方針と正反對のものであつたから、それがこの地廻米穀問屋に與へた影響も甚だ大であつたらう。彼等が如何にこの急激な變化に對應したか、又その結果は如何なつたかは、吾人の最も知りたいところであるが、惜しいことはこの記録が早く十年以前の事件を以つて終つてゐることである。

(昭和十年十二月十一日稿)

機械と労働者

藤 林 敬 三

機械の技術的進歩が人間、特に労働者の生活に及ぼす影響の諸方面に就いては、既に舊くから學者の注意して來てゐる所であるが、最近にはまた世界恐慌を轉期として識者のこの方面に對する關心が新に増大しつゝある。今私
I
が此處に簡単に紹介しやうとする左の四書は大體同様の表題の下に、機械と労働者に關する右の問題を取扱へるものである。

- (1) A. B. Brown; The Machine and the Worker, 1934.
- (2) H. Williams, ed, by; Man and the Machine, 1935.
- (3) W. D. Stewart; Mines, Machines and Men, 1935.
- (4) W. F. Watson; Machines and Men, 1935.

尙ほこれ等の著作が共に英國人の勞作であることを豫め注意して置く。

A. B. Brown: The Machine and the Worker, London, Ivor Nicholson and Watson, 1934, pp. 215.

機械の技術的進歩に關して、最近識者の注意を強く惹くに至つた問題は一つは所謂技術的失業の問題であり、他はそれの一解決案と見做される労働時間の短縮の要求である。換言すればそれは富と餘暇の公平な分配に關する問題であり、要求である。人若し人道主義的立場に立つならば、人間は機械の奴隸ではなく、機械を扱ふものが人間であり、元來機械と機械の技術的進歩とは人間のために存してゐる筈のものであると主張するであらう。そして現代の産業制度の下に於いて機械とその技術的進歩とがこの主張に反するが如き事實を具現してゐるとすれば、それは機械の罪ではなくして、機械の背後にある資本の力、機械の利用の方法、従つて資本主義的精神、利潤追求の精神の結果であると思ふ。著者ブラウンの本書に對する立場は正にかくの如きものである。しかし彼はこの立場から問題の經濟上の具體的解決の要求を詳論することを目的とせず、彼の關心は寧ろ右の要求に於いて多く看過せられる問題、即ち生産に於ける人間的費用、機械の労働者の生活に對する影響の心理學的並に倫理學的問題を明かにするにある。かくて本書は「經濟學と心理學の境界線上」の問題に重點が置かれて居り、従つてそれは寧ろ労働者心理學の一文獻であると思ふべきものである。

本書は十五章に分たれてはゐるが、右の意味に於いてその主たる内容を成すものは労働者の熟練、産業上の疲労、單調と倦怠、労働者の主觀的態度、作業上の満足、作業に對する動機に關する諸章と、最後に餘暇問題——この問題に就いては最近特にアメリカに於いて強く人の注意を惹きつゝあることを此處に指摘して置くことも無益ではなからう。私は何れ後の機會にその方面の文獻の紹介をも行ひ度い考へである。——及び餘暇中の労働教育問題とである。右の諸問題中私は此處に労働者心理學の立場から觀て、彼に得意の見解を多少紹介して置かうと思ふ。

ブラウンは労働喜悅に關する H. de Man の研究中その統計的概括の價値を疑はしいものとし、彼自身は一九三二年に種々なる職業を持ち、種々なる地方から來てゐる、男女合計約五十人の労働者に就いて次ぎの如き研究を行つた。ブラウンに依れば作業上の満足感凡そ次ぎの三つの點に關聯する。即ち

- (1) 作業上の如何なる點に労働者は最大の興味と喜悅とを感じる傾きがあるか。
- (2) 作業上の如何なる點に於いて彼等は疲労と倦怠を感じるやうになるか。
- (3) 満足或は不満足を増大する條件は如何なるものであつたか。

そしてブラウンの研究の結果に依ると、その労働に於いて殆んど或は全く興味を感じることなく、また満足を感じることなき労働者は大部分半熟練労働の送り作業 Feeding operations に従事してゐたものであつた。これに反して労働者が作業上多少の程度の興味と満足とを見出し得たのは凡そ次ぎの諸點に於いてである。即ち(a)作業上の技術、(b)技術的技能、(c)作業の首尾よき完成、(d)作業結果に對する關心、(e)他人との接觸、及び(f)作業上の責任これである。

更に作業に對する動機に就いてブラウンは次ぎの如くに云ふ。産業上の動機は常に意識的に且つ個別的に作用してゐるものではなく、多數にしてまた種々の動機が混在して居り、寧ろそれは無意識に作用しつゝあると見らるべきものである。従つて個々の動機を抽出してこれを論ずることは甚しく非現實的である。しかも彼は尙ほ次ぎの諸動機を區別してゐる。

- (1) 欠乏の感 (Want) 純粹の肉體的食慾及び基本的不足感の壓迫
- (2) 恐怖心

(3) 競争心

(4) 食欲

(5) 権力を得んとする意志

(6) その他の諸誘因——その主たるものは作業それ自體の興味といふよりは寧ろ作業の結果及びその報酬に基づいてゐる。

(a) 創造的諸動機

(イ) Skill-hunger (或はウィップマンの云々 Instinct of workmanship)

(ロ) 好奇心

(ハ) 構成的發明心

(b) 社會的諸動機

これ等の諸論から見ても、ブラウンの分析的研究は労働者心理學上の一見解として吾々の参考に價する。そして彼は機械とその技術的進歩が直接労働過程に於いて労働者の生活の主觀的方面に及ぼす影響を重視することに依つて、生産上の眞の人間の費用を考察するものとなす。かくて彼は英國に於ける産業疲労の研究が労働者の作業上の苦惱を軽減する目的ではなく、労働能率の増進のために開始せられたものであるとの苦言を呈し、また人間の要素の考慮が不充分である場合には能率的方法是は非能率的となり、科學的管理法は非科學となり、合理化は非合理的なものとなると評してゐる。そして技術的進歩は人間に對して充分の餘暇を提供する筈のものであるといふ立場からすれば、ブラウンの究極的理想は正に「労働と遊戯、産業と藝術が合一し、人の技術が機械の作業を、機械が人の

技術を完全し、餘暇が労働の生活を、労働が餘暇の生活を完全にする」といふ點に存してゐる。

本著者ブラウンは大學擴張講座その他に於いて常に労働者に對する教育的事業に従事して居り、本書はまた University Extension Library の一冊として公刊せられたものであることを附言すれば、讀者は本書の立場をよりよく首肯することが出来るであらう。

三

H. Williams, ed. by: Man and the Machine, London, Routledge, 1935, pp. xii + 207.

本書は最近の機械の技術的進歩が労働者の生活に及ぼす諸方面の影響に就いて、産業上の實際経験を有する雇主側と労働者並に第三者としての客觀的觀察者の三方面の人々(合計十一人)の諸見解を集録したものである。これ等の見解の内右の第三部の人々の見解を除いては、専門的、學問的見解として見做さるべきものはない。且つ右の第三部の人々の見解と雖も僅かに限られた紙數中に要約せられて居り、その個々のものに就いて充分専門的な見解を求めることは甚だ期待薄いと云はなければならない。かくて本書は全體として科學的勞作としての價值は僅かである。

しかしそれにも拘らず、吾々は此處に興味ある意見の對立を見ることが出来る。即ちそれは第二部に屬する労働者側の見解に従へば、大體機械化の發展に依つて従前の熟練労働者はその生産上の役割の重要さを喪失し、彼等は作業上の責任感と自負心を喪失し、彼等は機械の前に個性を持たない單なる數量的な存在として機械に附屬するに至らしめられてゐる。かくの如き状態は、その過去に於いて熟練労働者としての優越せる産業上の地位を知るものに取つては、機械化の發展に對して悲觀的な見解を披瀝せしめる。これに反して第一部の雇主側の諸見解に於いて

は、殆んど全く悲觀的な論調を見出すことは不可能であつて、其處では専ら樂觀的な、調和論的な見解が存して居り、従つて機械の技術的進歩に關しては一般に直接肯定的な意見が存し、若しくはそれを前提とする見解が存してゐる。そして第三部に於いては、労働組合の見解を代辯するものは技術的進歩の當然の結論として労働時間の短縮と賃銀の増大を要求するのに對して、經濟學者の立場から E. F. M. Durbin は諄々として補償説の眞實を説明してゐる。

主として第三部に表明せられてゐる技術の進歩の労働者に對する肉體的、主觀的影響及び所謂技術的失業を一時的现象と見做す補償説の専門的、科學的見解の當否は暫らく置いてこれを觀れば、本書は種々なる人々の經驗と、また種々異なる見解とそれに基づく論策と、従つて異なる利害を代辯する意見の相違を簡單に吾々に提供して下れる點に於いて多少の興味なしとしない。そして恐らく同様の異なる見解が單に「場合」に於いてのみならず、他の資本主義諸國に於いても亦容易に見出され得るであらう。

四

W. D. Stewart; Mines, Machines and Men, London, King & Son, 1935, pp. x. 180.

本書はその表題に示されてゐるやうに、英國に於ける炭礦業の技術的合理化の發見、労働者の生活に對する影響を主題とするものである。しかも著者の云ふ所に依れば、本書に於いて問題は礦夫の見地から取り扱はれてゐるのであつて、従つて本書の内容が、炭礦夫の労働並に文化生活上の更生のために、それに望ましからざる影響を及ぼすと見做される技術的合理化を中心とする労働諸條件の摘出に重點を置いてゐることは、素より當然である。この特色の外に本書は更に一つの特色を保有してゐる。本書は英國炭礦業の技術的合理化に關する専ら經濟學的研究

であると云ふことが出来ないものであつて、その經濟學的考察と並んで著者の重要視してゐる點は、技術的進歩の労働者の醫學的並に心理學的方面に及ぼす結果である。既に英國の炭礦業に關する經濟學的研究は廣く行はれてゐる所であつて、従つて本書の貢獻はその質量的方面から云つても勿論その方面に存するのではなく、寧ろ炭礦夫の醫學的並に心理學的、特に炭礦労働者心理學的研究に存すると云ふ方が適當であらう。そしてこのことはまた本書に序言を寄せたマックグレゴール教授の指摘する所である。

著者スチュワートは問題の考察の範圍を大體今世紀初頭以來に限つてゐる。過去三十年間に於ける英國炭礦業に於ける經營規模の増大と機械化の發展は労働諸條件の改善よりは寧ろ労働者の生活を惡化した。即ち大規模の經營は益々労働者をして單なる生産上の要具視する傾向を増大したし、また事實機械化の發展は炭礦夫から従前の熟練を奪取し、作業過程の合理化は労働の強化と災害率の増大をさへ齎した。政府は労働諸條件就中賃銀に關する法制的保護を期待してゐるけれども、炭礦の地方的事情の複雑な相違からその實現は甚だ期待薄いものである。そしてこれ等の諸點は著者の實際經驗とその實證的研究に基礎づけられてゐるのであるが、その個々の點に更らに立入ることを止めて、此處では著者自身の言葉を借りて本書の特色を一層明かにして置かうと思ふ。

スチュワートの炭礦夫に關する労働者心理學の見解として本書中に指摘せられたる所は、別に吾々に取つて新しい解釋を提供してはゐない。しかし彼は問題の性質上この方面に對して産業心理學の適用を説いて次ぎの如く云つてゐる。即ち「産業心理學の範圍はその關聯する所更らに廣汎でなければならず、また産業とその労働者の全生活と状態とを包含しなければならぬ」と。(圈點は筆者) しかも未だ労働者自身も亦雇主も更らに産業心理學者もこのことを充分自覺してゐないことは、スチュワートのよく知つてゐる所であつて、このために彼は關係諸方面の人々

の理解ある協同を力説しなければならない状態にある。能率心理學としてこの産業心理學が労働者心理學に發展することは、相當大なる飛躍でなければならない。このことをスチムワートが如何程自覺してゐるかは疑問であるが、彼の右の簡単な言葉の内によく労働者心理學の問題が表明せられてゐることだけは吾々も認めなければならない。そして彼のかくの如き主張が労働者の見地に立つて、眞に労働者の生活上の厚生を期待する立場からせられてゐる點も亦吾々の見逃し得ない所である。そしてこれが本書の持つ究極の特徴である。

五

W. F. Watson, *Machines and Men, An Autobiography of an Itinerant Mechanic*, London, George Allen & Unwin, pp. 226.

本書はその副題に示されてゐるやうに巡廻機械工としての著者の自叙傳である。著者ワトソンは貧しい労働者の家庭に生れ、既に十才にして工場労働の生活に入り、當時熟練工としての労働者が總て徒弟の生活を送るに比して、彼は貧困の故にその常道を踏むことを得ず、しかも彼の獨立心と才氣と機智と更らに仕事に對する愛好心とに依つて施盤工としての熟練を短日月の間に修得した。しかし彼は稍々短氣に過ぎる性格の一面を持つてゐたために、凡そ一八九〇年代の半頃に始まり數年前に終つた彼の労働生活に於いて、彼は轉々として工場から工場へ雇主を換へその數五十ヶ所に及んでゐる。——勿論後には彼の持病がその直接の原因になつたことも屢々ではあるが——本書はこの異常な労働者の自叙傳である。

先づ吾々はこの労働者の自叙傳から、英國産業に於ける最近約三十年余りの間に於ける機械化と大量生産の發展とそれの影響に關する労働者自身の見解として教へられる所が少くない。特にその影響は熟練労働者の供給に關

聯する徒弟制度の崩壊にある。しかしワトソンの見解に従へば、それ故に労働者の熟練が喪失したと見ることは早計であつて、今日尙ほ小經營の工場は廣く存して居り、其處では依然として従前通り労働者の熟練が要求せられてゐる。それ故に機械の發達に依りて労働者は必ずしもその奴隸となることはない。特にこの問題に就いては彼は本書の最後の一章として彼の自叙傳とは別に「機械とその目的」なる一論文を附録して居り、其處で彼は機械は決して人間をそのロボットとするものでないことを力説してゐるのであるが、それは多分に機械文明に關する彼の人道主義的立場の見解に依つて補足されてゐるものである。この外吾々に取つて興味のあるのは過去と現在に渡る労働者自身、或は労働者の家庭環境の影響の變化に就いて——これ等の方面は外部の觀察者には容易に近づき難い點であるが——彼の叙述中から教へられる點も少くない。

しかし右の點以外に、労働者の自叙傳として本書の持つ意義は云ふまでもなく労働者心理學の研究素材としてである。ワトソンは前述の如く労働者としては寧ろ異常の存在であつて、彼の例を以つて直ちに通常の労働者の場合を測ることは素より不可能である。しかも吾々はこの異常なる労働者の意識生活に就いて稍々詳細な研究資料を供給されたことを看過する譯けには行かぬ。労働者の自叙傳の類書の少ない場合には特に然りである。この意味に於いて本書は正に世の労働者意識生活の研究者に取つては一つの價値ある文献として止まるであらう。

六

技術と技術の發展に關する識者の注意は既に舊くから存して居り、最近では特にドイツとアメリカに於いて學者の注意を惹くこと甚だ大であつて、特にドイツの場合には既に技術の社會科學的研究に關して Monograph の詳細な研究が積まれつゝある状態であり、アメリカの學者の努力はそれに次いでゐる状態である。これに對して英國の

場合には技術に關する社會科學的研究は遙かに遅れてゐる。それは素より獨、米兩國に比較すれば英國の産業技術の實際がその進展の度に於いて多少遅れてゐることに因るであらうが、今後は共にこの方面の研究が大いに開拓せられることが望ましい。この意味に於いて私が此處に紹介した四書の如きは正にその先驅的役割を果すものであらう。

しかし右の四書は共に單に機械の技術的進歩が労働者の生活に及ぼす影響の如何を主題として居る。換言すればそれは一方では技術の發展に依る所謂技術的失業の問題であり、他方では労働者の身體的、心理的方面に對する機械の影響の問題である。これ等の問題が技術に關する吾々の關心を持つ問題の總てに觸れて居らぬことは云ふまでもないが、此處に見逃し得ない一つの點は、右の四書中特にウヰリアムスの編輯せるものを除いては他の三書が共に右の後者の問題に重點を置いて居り、若しくはそれに關聯して價值ありと考へられるものである點である。しかもそれは何れも労働者心理學の研究と關聯して重要であると見做される。此處に紹介せる技術に關する英國の研究がかくの如く特徴付けられることは、獨、米兩國に比較して一つの特異な學問的傾向であると云はねばならない。

昭和十年十二月十八日稿

本邦財政學新刊書に就て

高 木 壽 一

近年財政は經濟生活に與へる影響を通じて、社會生活一般に大なる決定力を有するやうになつた。従て、財政に對する國民の關心は俄に増大し、財政諸問題の研究、著書等も多く發表刊行される。財政問題の解釋に基礎理論を提供する財政學書の刊行も十年に入つて殊に増加したやうである。日本財政學のために甚だ喜ぶべきことと云はねばならない。

昭和十年に刊行せられた財政問題に關する著書論文は數多くして到底枚舉に遑がない。茲に紹介するのは、財政學一般を主題とする新刊書數種である。但し、二月發行の、永田清氏の財政學概説上卷については本誌讀者の大部分は既に讀まれて居るものとして茲に改めて紹介する必要はないものと思ふ。

其以外の財政學一般を主題とする新刊書にして、筆者が紹介しやうとするのは次の數種である。

- 一、牧野輝智著 財政概論 昭和十年二月刊行
- 二、土方成美著 財政學原理 昭和十年六月刊行
- 三、神戸正雄著 財政學 昭和十年九月刊行

本邦財政學新刊書に就て